

令和5年度人権問題文芸作品「のじぎく文芸賞」入賞作品及び受賞理由

記者発表用資料

賞	部門	部	作者名 (ペンネーム)	作品名	受賞理由
最優秀賞 (4名)	小説		<small>なかつた</small> (中田 あきこ)	私は、大丈夫	障害がある弟がいて、幼い頃から我慢をすることを強いられてきた。母親は弟につきっきりで、父親もあまり家族と話し合うことをしない。しかし、「誰か一人が我慢し続けることのないようにしよう」という父親の言葉で、主人公の未来がゆっくりと開けていく。最後に主人公が自分に言い聞かせるように「私は大丈夫」とつぶやくセリフが秀逸だ。
	随想		<small>ななくさ</small> (七草 かまど)	刻む	被差別部落出身の作者が打ち明けるエピソードは、体験した者だけが持つ迫力に満ちています。ところが、結婚するにあたって、最初の壁にぶつかります。自らの出身地に目をそむけず、勉強することによって、自分自身を変えていこうとすることです。故郷への思いは人それぞれです。どんな方法で理解していくかを決めるのは、自分自身に他ならないと教えていただいたような気持ちです。
	詩		<small>もりもと ほのみ</small> 森本 宝乃実	いのちの命	「いのちの命 いのちの命」や「ドックンドクン 生きている」の繰り返しが、力強いリズムを作り、それにのせて「いのちにも命がある」とか「他人が奪うことは出来ない」など、命の大切さを歌い、さらに途中から転調して、悲しい時、辛い時―嬉しい時、楽しい時の「深呼吸」をはさんで、命の輝きを歌い上げるという詩の構成もよく考えられています。声に出して読んでも、力強いリズム感に支えられた明るい歌になっているところもいいと思います。
	創作童話		<small>はらくち くるみ</small> 原口 来瞳	二人が生きると いうこと	病気のせいで上手く話せず歩くこともできない妹の望美のことで、姉の夏希はいつもいら立っている。何でも押し付けられる不満が日々増していく夏希は、祖母のところへ駆け込み、そこで妹が生まれた日のことを聞かされる。親が、つけた名前は姉妹二人を合わせると「希望」になることを知る。疎外されていたという悩みを乗り越えて、自分の存在を確認する。葛藤する姉の心理がよく書けている。
優秀賞 (8名)	小説	一般	<small>かじもと ちさき</small> 梶本 千紗姫	あの雨の日に	視覚障害者を手助けしたことで、自分自身のことだけでなく社会を照らす小さな灯になることを考える主人公。文芸部で小説を書く主人公の視点も、目の不自由なお爺さんとの出会いと並行して、少しずつ変わっていくのに気付く。社会福祉にも興味を始めた主人公は自身の本心よりも周りの目を優先する人間、と自身を定義するが、実は誰以上に繊細な心の持ち主ではあるまいか。知らないことに気づくことが第一歩と教えられ、やっと小説を完成させる。
		学齢	<small>おおにし りお</small> 大西 莉央	春にあかりは輝 きだす	中学生になった主人公の期待と不安、そしてまわりの友人との繋がりがテーマだ。友だちを作ることは、成人してからでもなかなか難しい。様々な行き違いがあったり、無理をしなくてはいけなかったり。しかし、そうやって試行錯誤の末に本当の友だちに遭えるのだろう。中学生らしい心の動きが良く描けている。
	随想	一般	(コスモス)	安心感を伝える 存在に	言葉が詰まってしまう「きつ音」に悩む主人公。それは周囲が想像する以上の生きづらさとなって主人公を苦しめてきました。長きにわたる苦しみを思うと、涙が出そうになります。ところが、大学に入学したとき、転機が訪れます。生きづらさは相変わらず続きます。それでも、ひとつひとつを自ら克服していこうとする姿に拍手を送りたいと思います。
		学齢	<small>しらかわ はると</small> 白川 遙人	優しさで広がる 世界	左手足に麻痺が残るお母さまを助けながら成長してきた主人公。毎日のことなので全部は書き出せないほど色々なことがあると告白しながらも、母への視線は優しく愛に満ちています。それはおそらく、父や妹と共に助け合うため、心に余裕があるからでしょう。家族の団結は力となります。何よりも自分を育ててくれた母への感謝が満ちていることに打たれます。優しさがさらなる優しさを生むことを教わったような気がします。

詩	一般	(ひの <small>しゅね</small> 朱寝)	「ひかりのよう なこえでした」	テレビで報じられていたある自死のニュースをきっかけに、作者は「人の死」に向き合う。自分が気づけない多くの人が自ら命を絶っていることを思い、それを救うことができない自分の無力さを思い知ります。そんな時、バス停で隣にいた人から「良い天気だねえ」と声をかけられる。「人に寄り添い、照らし、あたためる『ことば』を人は持っている」と。無力さを言うまえに、このバス停の隣の人のように、ことばをかけることで、周りにいる人の心に寄り添うことができるのではないかと気づくのです。
	学齢	<small>きたぐち ひまれ</small> 北口 緋希	大切な人たち	発表の時にしてしまった失敗がトラウマになって、自信を失い、悩み、落ち込んでいた作者が、気持ちをきりかえて前向きな心へ変わったのは、自分の周りの友達や先生の励ましのおかげだったと気づきます。人の優しさや思いやりに触れ、支え合うことの大切さ、すばらしさに気づくことで、さらに司会や代表あいさつまでできるようになりました。そしてこんどは励ますほうに、見守るほうに、応援するほうに——という心の変化も大切な変化です。
創作童話	一般	<small>さば くうたろう</small> (鯖 喰太郎)	お母さんといっ しょだから	捨て猫のマイは、母親猫のために食べ物を探しに行くが迷子になってしまう。助けてくれたおばさんに飼われることになったマイ。母親のことが心配で家を飛び出してしまう。母猫はすでに死んでいたのだが、その死を理解できないマイ。「お母さんは心の中にいる、マイの半分はお母さんなんだ」というおじさんの言葉で、母親はいつも自分と一緒にいるんだと納得して、喪失感から立ち直っていく。
	学齢	(らいおん ねこ)	優の挑戦	生まれつき足が不自由な優は、その事実を受け入れられなくて引きこもりがちになってしまう。しかし、母に連れ出された公園で声をかけてきた心美と打ち解け、登校する決心がつく。ボランティアに参加することになり、徐々に自信を取り戻していく。支えになってくれた友だちの存在が大きかったことはもちろんだが、まず第一歩を踏み出す勇気を持つ大切さを問いかける作品だ。

※カッコ内はペンネーム